



医療

新型コロナウイルスの流行以来、医療についての話題を耳にする機会が増えました。医療への関心をさらに深めるきっかけとなるような本を紹介します。

『泣くな研修医』

中山祐次郎／著 幻冬舎



新米研修医として働く隆治。彼を待ち受けていたのは、想像以上に過酷で厳しい世界でした。先輩医師や看護師、患者やその家族の中で、日々葛藤、成長していく隆治を通して、現代のリアルな医師の姿が浮かび上がってきます。現役外科医の作者だからこそ書けた医療小説。続編が出ているので、その後の彼の成長も楽しめます。

『死体が教えてくれたこと』14歳の世渡り術

上野正彦／著 河出書房新社



生きている人間ではなく死んだ人を診る「監察医」という医者を知っていますか？ 監察医は警察が事件や事故を捜査する上で、亡くなった方の死因を特定するという重要な役割を担います。死因をさぐることは死体と語ること、生きている人間同様心を込めて丹念に診ることを心がけ、2万体の死体と語り合った元監察医の著者による、数々のエピソードに心を打たれる一冊です。

『iPS 細胞の研究室』 体のしくみから研究の未来まで

京都大学 iPS 細胞研究所 国際広報室／編 東京書籍



iPS 細胞という名前は聞いたことがあっても、どんなものか知らない人も多いのではないのでしょうか。この本は iPS 細胞とは何かという話から始まり、人体のしくみなど生物学をわかりやすく解説しています。最終章では、インタビューを通して、研究者の素顔にせまります。

『人魚の眠る家』

東野圭吾／著 幻冬舎



もう二度と目を覚ますことのない体、機能しなくなった脳、動いている心臓。頬は温かくて柔らかいのに、人工呼吸器をとれば酸素を取り込むこともできない。どこまでが「生きている」なのか。どこまでが許される延命措置なのか。娘を守りたい母親のとった行動は……。大切な人の生死の判断を委ねられた時、あなたはどうか？

『後悔病棟』

垣谷美雨／著 小学館文庫



主人公のルミ子は母子家庭で育ち、母の期待に応じて医者になりました。しかし、中堅になった今でも、生来の口下手と性格のせいと患者とのコミュニケーションがうまくいかず悩む毎日。そんなある日の昼休み、彼女は病院の中庭で聴診器を拾い、それを使って診察をしているとなんと患者の心の声が聞こえてきて…!?

もう1冊!

『海をわたった母子手帳』 かけがえのない命をまもるパスポート

中村安秀／著 旬報社

自分の母子手帳を見たことがありますか？ YA 世代のみなさんは、なかなか日頃から目にするには少ないかと思います。日本で生まれた母子手帳は多くの家族と命を支え、そして今や世界にも広がっています。母子手帳とはどんなものなのか、性別を問わず知ってもらいたいと思います。ぜひ読んでみてください。そして自分の母子手帳も見せてもらってはいかがでしょう。